

ざいちのち 59

まちやむら，そこに住む人びと（＝ざいち）の，
知恵や生き方（＝ち）から学び，実践する活動です。

CSEAS
京都大学
生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」

朽木フィールドステーション

日本の焼畑におけるカブ栽培（4） ——山北地区朴平の事例—— 京都学園大学 鈴木玲治

2012年に引き続き、2013年にも「焼畑林業」が営まれている新潟県村上市山北地区を訪れ、聞き取り調査を行った。焼畑林業は、ミャンマーなどで営まれているタウンヤ造林と同様のアグロフォレストリーであり、新規植林地で焼畑を営むことにより、地拵えや下刈りの経費が節約できるメリットがある。

山北地区の焼畑林業は、林業そのものの衰退と共に減少していったが、現在でもスギの新規植林地において焼畑による温海カブの栽培を営む世帯が残っている。今回訪問した山北地区朴平では、5-6世帯が今でも焼畑を営んでおり、今年は4世帯がスギ皆伐後の新規植林地で焼畑を行った。また、減反による休耕田にスギ葉を持ち込んで焼畑を行うこともあるそうである。

かつて、朴平では40年程度の伐期でスギの植林地が皆伐され、その跡地で地拵えを主目的とした焼畑が営まれてきた。昔はスギの価格が高かったため、小規模の伐採でも十分な金になった。このため、一度に伐採するスギ植林地の面積は小規模なものが多く、その皆伐跡地で営まれてきた焼畑も、必然的に小面積なものであった。しかしながら、スギが高く売れなくなった現在では、一度に大面積のスギを伐採しなければ、伐採コストに見合った収入が得られない。このため、スギの皆伐跡地も大規模なものが多くなり、その跡地で営まれる焼畑も面積が大きくなる傾向にある。規模の大きな焼畑は、数世帯がグループを作って共同で火入れを行い、その後は区画を区切って世帯別にカブを栽培している。面積が特に大きかった2012年の焼畑は約2ha（我々が余呉で営む焼畑一筆の20倍程度）もあり、30人程度の人数で18時頃から明け方まで火入れを行ったそうである。

火入れの時期はお盆前であり、火入れの1ヶ月前頃から草刈りを始めて土を露出させると共に、皆伐後に残ったスギの枝葉を立てかけて乾かす。これらの枝葉が十分に乾いた後、伐開地に均等にまいて火入れを行う。8/20前後にカブの播種を行い、播種後には覆土のためにかかる地表面を搔

く。ただし、鋤などで深く耕起することはない。9月下旬頃から間引きを兼ねたカブの収穫を始め、10月には収穫に適した大

きさ（直径7～8cm程度）にまで育ったカブが収穫できるようになる。それ以降は、2週間おきに大きく育ったカブを選んで収穫し、この方法で12月中旬頃まで収穫を続ける。カブの収穫が終われば、翌春にはスギの苗木を植える。また、かつては1年目に温海カブを栽培した後、2年目、3年目にはアズキ、ソバ、ジャガイモ、ナガイモ、スイカ、ゴボウ、トウモロコシなど、自家消費用に様々な作物を栽培したそうであるが、現在では2年目以降の作付けはあまり行われていない。

焼畑による温海カブの収量は、概ね1haあたり10t程度である。これらのカブは、主に甘酢漬けに加工されている。また、農協などを通じて生のカブを販売する場合は、1kgで200～220円程度の値がつく。1世帯が10a程度の焼畑を開き、そこで採れたカブを生そのまま販売したとすると、20～22万円程度の収入となる。竹田・渡辺（1995）は、山北の焼畑で栽培したカブによる収入を10aあたり16万円、それに必要な労働力を9人・日と試算しており、このような焼畑は規模が小さいために主たる収入源にはならないが、様々な就業形態の中から時間を捻出して行う「余業」としては十分な魅力があると述べている。現代における焼畑の存続可能性を考える上で、このような余業としての魅力は重要な要因であるといえるだろう。



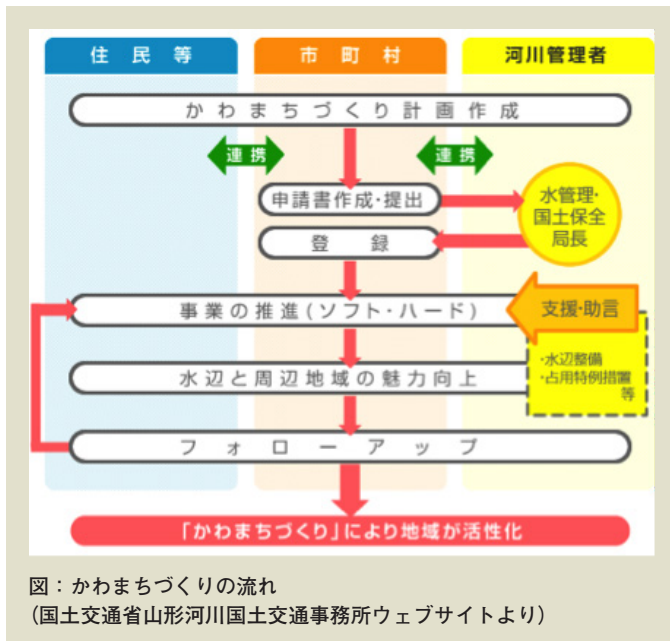
写真1：スギ皆伐跡地での焼畑による温海カブの栽培（手前）と、それに隣接する林齢異なるスギ植林地（奥）

参考文献
竹田晋也、渡辺弘之（1995）「新潟県山北町の焼畑林業」京都大学農学部演習林報告67号 p. 31-39

筏がつなぐまち～保津川筏復活プロジェクトの意義を考える⑨

大阪商業大学経済学部 原田禎夫

今回は、近年の流域における行政計画において、保津川筏復活プロジェクトがどのような影響をもたらしたのかについて考える。



従来この地域（亀岡市）における各種行政計画の策定にかかる審議会等では、多くの他の地域同様に自治会や既存の各種団体の長などの、いわゆる「充て職」などで指名される市民委員が多く、メンバーが半ば固定化され一種の閉塞的な状況におかれていた。こうした中、京都府や亀岡市は2000年ごろから府民・市民との協働の実現を新たな行政目標として掲げ、NPOなど新しい市民団体からも積極的に審議会等の委員への登用をめざすようになったが、当初は十分な政策提案能力をもった専門性の高いNPOが少ない、という課題があった。

このような中で、保津川をめぐるアユモドキの保護活動や漂着ごみ問題、そして筏復活プロジェクトは、高度な専門性が必要とされるだけでなく、市民にとって“わかりやすい”協働型のプロジェクトであり、NPOと行政の双方にとってお互いの距離を近づけることに貢献したといえる。実際、2008年ごろからは保津川筏復活プロジェ

クト連絡協議会を構成する各団体や研究者が保津川をめぐる各種審議会委員から選出されることが多くなるとともに、関係者間での情報共有も進んだ。

ここではその一例として、2011年より京都府と亀岡市が共同で進めている「保津川かわまちづくり計画」を取り上げる。この計画は、従来は別々に行われてきた河川整備計画と、まちづくり製作を一体的に進めることをめざして、2010年から国土交通省が「かわまちづくり支援制度」を通じて全国で展開してきたもので「観光などの活性化に繋がる景観・歴史・文化等の河川が有する地域の魅力という『資源』や地域の創意としての『知恵』を活かし、地方公共団体や地元住民との連携の下で立案された、実現性の高い河川や水辺の整備・利活用計画による、良好なまちと水辺が融合した空間形成の円滑な推進」を図るものである。特に、河川敷地の占用に関して柔軟に対応するなど、河川管理者（京都府）が積極的に地域の取り組みを支援することとされている。

この「保津川かわまちづくり計画推進協議会」が設置され、これまでにない市民参加の実現に向けた模索が続けられている。今回はこの協議会について考察する。



農具（4）：百姓の道具は生活の基 トウツバ（唐箕）

守山 FS 藤井美穂

稲刈りの後に脱穀したモミをドウス（土臼）にかけて、モミ殻（A氏はモミ殻を「ヌカ」と言っているが、ここではモミ殻と記す）を外して（本ニューズレター No.52 参照）、唐箕^{とうみ}にかける。在所では唐箕を「トウツバ」と呼んでいる（以降、トウツバと記す）。トウツバは脱穀した粳のほかに、麦、大豆などに混入しているワラ屑、ごみ、未熟な粒の選別に使用した。

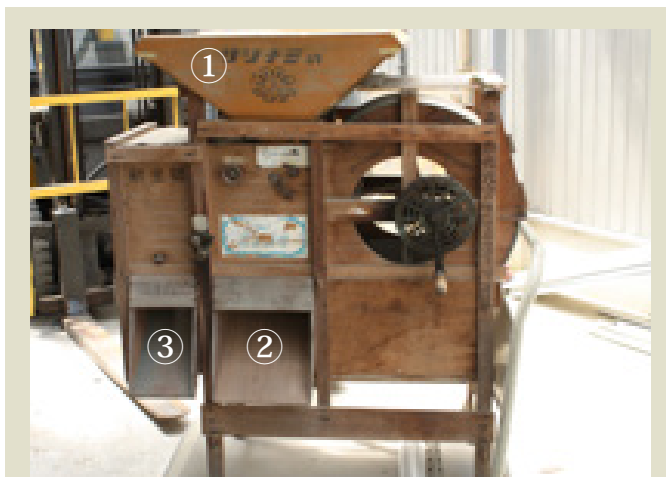


写真1：昭和時代の唐箕。愛知県指浪（さきなみ）製作所（大正2年創業）の「愛知唐箕」。

上部の漏斗状の口から穀物を入れる（写真1の①）。穀物供給量を調節するレバーで穀物を少しずつ落としていく。手回しハンドルにより、風洞のなかの4枚羽根の羽根車が回転する。風力により選別されたモミは、ハンドルがある側の一番口（写真1の②）、次の二番口（写真

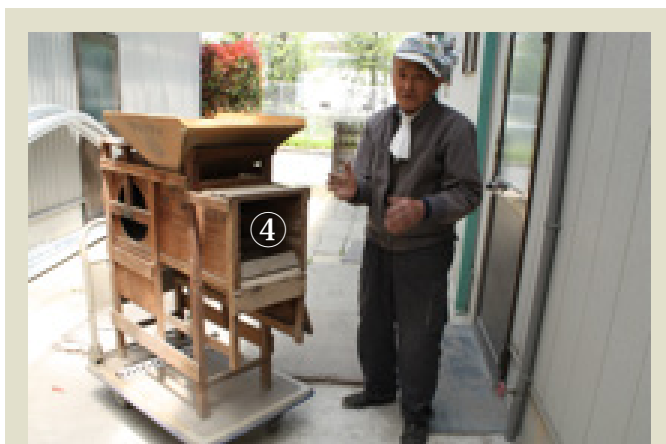


写真2：唐箕の説明をするA氏（1926年生）

1の③）に「ええコメ」（良いコメ）、「こゴメ」（悪い米）と屑粒が落ちる。軽いモミ殻は3番口（写真2の④）から吹き出る仕組みになっている。作業は二人で行った。一人は穀物供給レバーを調整しながら穀物を落とし、もう一人はハンドルを回して送風する役目をした。

在所では納屋にはドウスのそばにトウツバが置いてあった。一般的に在所では納屋に隣接してモミ小屋があった。小屋の壁に四角い穴をあけて、納屋からモミ小屋のなかにモミ殻を吹き飛ばした。

モミ殻はとても重要なものであった。A氏はモミ殻の使い方から昔の人の知恵が分かるという。竈（かまど）で火をたくときや風呂をたくときに、一つかみのモミ殻を火のうえに入れると燃えやすくなった。火鉢やこたつの炭火はモミ殻を燃やした灰のなかに入れて保温した。また、畑の土の上にモミ殻をまいておくと、「雨の力」が地面に直接にかかるのを防いだ。畑にモミ殻をまいておくと野菜の発芽がよかった。

唐箕の歴史は古く、中国の漢代にまでさかのぼる。唐箕は、その字のごとく唐（中国）から伝わった箕（み）に代わる道具という意味である。江戸時代に全国に広がった。つまり箕の機能を機械化して大型にしたのが唐箕であり、風力をつかって穀物を選別する。

図1に見るように、作業小屋の左の壁際に唐箕が設置されている。上部の穀物を入れる口があり、下には1番出口、2番出口がある。小屋には土臼、足踏み式の唐臼がある。唐箕の基本的な構造は全く変化していない。2千年経てもその構造は継承されてきたのである。

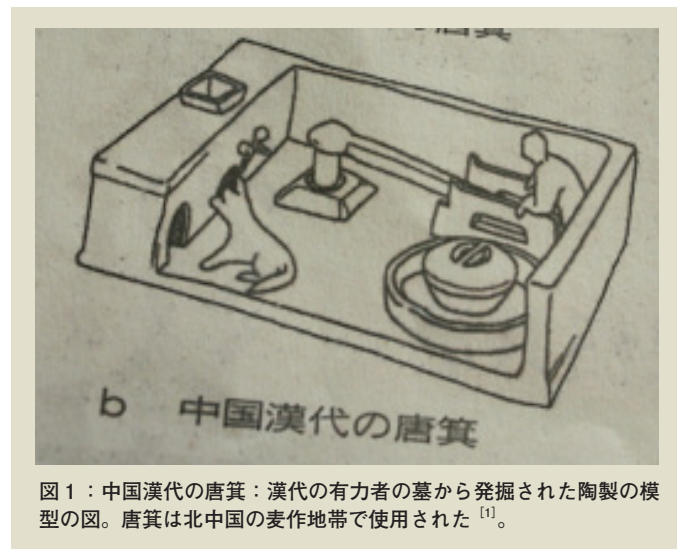


図1：中国漢代の唐箕：漢代の有力者の墓から発掘された陶製の模型の図。唐箕は北中国の麦作地帯で使用された^[1]。

[1]『農業共済新聞』2011年2月9日「農具が語る祖先の歴史11 唐箕—送風機内蔵の選別器—ルーツは漢代の設置型」河野通明

バングラデシュの医療事情 ～ダイアグノスティック・センター

おおり医院勤務 東南アジア研究所特任研究員
分部 敏

バングラデシュにはダイアグノスティック・センター (Diagnostic Centre) という、病院の臨床検査部門をひとつの施設としたものがあります。日本にはない施設で、臨床検査センターと訳せばよいでしょう。そこでは、血液検査やレントゲン撮影、心電図、尿検査、超音波検査ができます。

アグラサラ孤児院のあるラオゾン (Raozon) の近くの町ヌアフラ (Nuaphra) の施設を 2012 年 11 月に見学しました。ビルの 2 階にあり、血液検査の器具やレントゲン撮影機、心電図計、超音波検査機器が備えてありました。レントゲン撮影には、日本製のデジタル画像診断システム (日本の富士フィルム製のデジタル画像診断システム: FCR PRIMA) を導入してあり、担当者が自慢気に説明してくれました。これはフィルムを使わない方式で、運転費用は安いと思いました。血液検査は、日本では血球算定(血算)

検査と生化学検査、免疫学検査などに分けられます。日本ではほとんど機械による全自動検査になっています。ここでは、血算検査は顕微鏡で赤血球、白血球、血小板を目視で計数し、生化学検査は 1 検体ごとに発色させて吸光光度計でメーターの数値を読みとり、電卓で計算するようで、検査室には顕微鏡や吸光光度計が備えてありました。

もしレントゲンフィルムだったら、この国では撮影したフィルム自体も本人に渡すのだらうと思いました。というのは、くも膜下出血の手術をダッカの病院で受けたことがある方と会ったことがありました。そのバングラデシュ人は、退院時サマリー (要約) と検査データ、手術記録などを持っており、私に見せてくれました。この国では、検査結果データは自分の物で、自分でお金を払ったものだからという考え方があったからだと思います。また、自分で保存管理するものということなのでしょう。

ここにはチャンバー (chamber) といって、中央から招いた医師が診療をする部屋がありました。ちょうどチッタゴン医科大学から来た医師 (MBBS doctor) が診療をしていました。午後 3 時から 6 時の間、曜日ごとに日替わりで医師が来るようでした。



写真 1: レントゲン撮影装置



写真 2: デジタル画像診断システム



写真 3: 血算検査で使う顕微鏡



写真 4: 生化学検査で使う吸光光度計



写真 5: 心電図計



写真 6: 超音波診断装置



写真 7: 待合室



写真 8: 大学から
来ている医師 (右)